

quibus uti. Laetis
quam appellatione.

quibusque inbus profeta ficit in
formulone prudentia passioing

quibusque inbus
prophetia ficit in

ولا نستطيع ان

沈黙博物館

سم عيب من مر. مين وانستيب وسيمين



brearū app
ulla mininc
germies qu
inluzans pe
transfines
no femp. i



femp. i. quibus hōmex confidit
interpretat ut quā multū colit.



quibusque inbus
prophetia ficit in

小川洋子

واسمى يوسوكو



quibusque inbus
prophetia ficit in



واسمى يوسوكو



quibusque inbus
prophetia ficit in



brearū app
ulla mininc
germies qu
inluzans pe
transfines
no femp. i

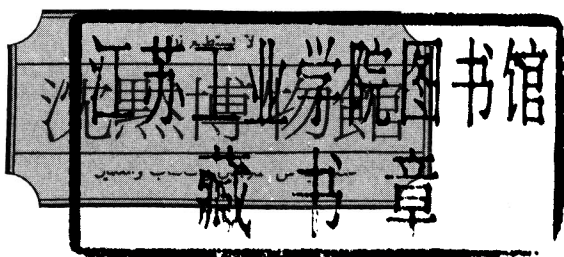


واسمى يوسوكو



quibusque inbus
prophetia ficit in

筑摩書房



沈黙博物館

二〇〇〇年九月十日 第一刷発行
二〇〇一年二月十日 第二刷発行

著者 小川 洋子

発行者 菊池 明郎

印刷 明和印刷

製本 牧 製本

発行所 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一五―三
振替〇〇一六〇―八―四二二三

ご注文・お問い合わせ、乱丁・落丁本の交換は左記宛へ。
〒三三八番七 大宮市櫛引町二六四 筑摩書房サービスセンター
TEL 046-615-1000

沈默博物館

装帧*吉田篤弘・吉田浩美

僕がその村に着いた時、手にしていたのは小さな旅行鞆が一つだった。中身は数枚の着替えと、使い慣れた筆記用具、髭剃りのセット、顕微鏡、そして二冊の本——一冊は『博物館学』、もう一冊は『アンネの日記』——それだけだった。

依頼主からの手紙には駅に迎えをやると書いてあったが、僕の容姿については何も伝えていなかった。うまく出会えるかどうか心配だった。僕はホームをつなぐ階段を降り、改札口を出た。他にこの駅で降りた人はいなかった。

「ようこそ」

待合室のベンチに腰掛けていた女性が近づいてきて言った。予想よりもずっと若い、ほとんど少女と言ってもいいほどの年頃だった。なのに物腰は礼儀正しく、洗練されていた。僕は妙に慌ててしまい、挨拶の言葉がきちんと出てこなかった。

「さあ、行きましょうか」

そんなことにはお構いなく、少女は僕を車に乗せ、運転手に向かって、

「出発してちょうだい」

と命じた。

季節は春のはじめで、風にはまだ冷たさが残っていたが、彼女はふんわり裾の広がった綿のワンピース一枚きりで、カーディガンさえはおっていないかった。空は気持よく澄み渡り、薄い雲が風に乗って流れ、あちこちの陽だまりにクロッカスや水仙やマーガレットが咲いていた。

駅前から続く大通りを抜け、中央広場を過ぎてしばらく行くと、すぐに田園風景が広がりはじめた。道をはさんで右手は雑木林、左手はジャガイモ畑で、そのずつと向こうは牧草地になっていた。さらに遠く、空と丘の境目からは鐘楼が姿を現わした。日差しはあらゆるものに等しく降り注ぎ、下草の陰に隠れた冷たい冬の名残を、全部溶かしつくそうとしているかのようだった。

「きれいなところですね」

僕は言った。

「気に入っていただけると、うれしいです」

少女は両手を膝の上ののせ、姿勢よく背筋を伸ばして前を見ていた。言葉を交わす時だけ心持ち首を傾け、僕の足元に視線を落とした。

「ここなら、仕事もうまくはかどりそうな気がしますよ」

「ええ、母もそう願っていると思います」

ようやく僕は彼女が依頼主の娘であることを知った。

車がカーブを曲がるたび、髪がパラパラと垂れてきて、少女の横顔を半分陰にした。生まれてから一度もハサミを入れたことがないのだろうかと思うほど、真つすぐでありのままの髪の毛だった。

「母はかなりのひねくれ者なので、びっくりなさらないでね」

少し打ち解けた感じで少女は言った。

「どうぞ、ご心配なく」

「感情的な行き違いから、仕事を途中で放り出した人が幾人かいたの」

「こう見えても、業界ではかなりのキャリアを積んでいる方なんですよ。そんな無責任なことはしません」

「ええ。送っていただいた履歴書を見れば分かるわ」

「僕の仕事は世界の縁から滑り落ちた物たちをいかに多くすくい上げるか、そしてその物たちが醸し出す不調和に対し、いかに意義深い価値を見出だすことができるかに係っているんです。かつての依頼主たちも皆、相当に手強い人物でした。彼らを目録にした方が、よっぽどおもしろいカタログになるんじゃないかと思うくらいです。とにかく、少々のひねくれには驚きません。大丈夫です」

ほんの少し少女が微笑みを見せたように思った。でもすぐにそれは行儀のよい澄ました表情の下に隠れてしまった。

いつしか道はアスファルトから砂利に変わり、幅も狭くなっていった。どうやら車は村の西は

ずれに向かつていようだった。あたりには低木の茂みが続き、イタチかりスカ、小さな動物が草の間を横切っていた。靴の中で、顕微鏡の部品がカタカタ音を立てていた。

小川にかかる石橋を渡り、なだらかな坂を登りつめると、仰々しい錬鉄の門柱がそびえていた。門はいっぱいに開かれており、車はスピードをゆるめることなく中へ滑り込んでいった。玉砂利が敷き詰められた小道は曲がりくねり、両脇に茂るポプラの巨木のために、日光がさえぎられて薄暗いほどだった。時折、タイヤに弾かれた小石が窓ガラスにぶつかった。

「お疲れさまでした。あちらです」

少女は窓の向こうを指差した。不意に視界が開け、台地の端に屋敷が姿を現わした。ガラスに押し当てられた指は白く華奢で、いたわしいほどに未成熟だった。

面接は書斎で行なわれた。依頼主は部屋の中央にしつらえられたピロッド張りのソファに腰掛けていた。もともとはクリーム色だったのだろうが、汗、手垢、唾、埃、あらゆる飲み物、菓子類の脂肪分、等々と思われる汚れが染み込み、それらが混ざり合っつうらぶれた色調に変色していた。クッションはつぶれかけ、肘掛は擦り切れて中の綿がのぞいて見えた。

依頼主はひどく小柄だった。身体中から養分が抜けたように痩せ細っていたし、腰はほとんど直角に折れ曲がっていた。両手を差し出せば、胸の中にすっぽり抱き留めることができそうだった。小柄という言葉が突き抜けた、極限の小ささを体現していると言ってもよかった。

その体格のためか、趣味の問題か、着ている洋服はどう評価していいのか見当もつかない代物だった。毛糸の帽子を頭に載せ、あとはもうバランスなど一切無視し、適当にチュックと縞と花柄の衣類で身体を覆っているにすぎなかった。まるで彼女自身が、ソファに付いた染みの一つみたいだった。

しかし何より僕が驚いたのは、迎えに来てくれた少女の母親にしては、依頼主が歳を取りすぎていることだった。どう見ても彼女は百に近い老人だった。身体中の隅々が老いに侵食されていた。干涸びてしまったこの肉体が、あの少女を生んだとはとても信じられなかった。

しばらくの間、誰も口を開かなかつた。老婆は肩をすぼめ、うな垂れたきり咳払い一つしなかつた。じつとしていると余計に身体は縮こまり、古い衰えた様子が強調されるようだった。

試されているのかもしれない、と僕は思った。これは沈黙の中で人柄を見ようとする種類の面接なのだ。あるいは最初から、老婆の気分を害する何かをしかしたのだろうか。例えば、手土産を忘れたとか、ネクタイの趣味が悪いとか……。

考えるべきことがたくさんあった。僕は助けを求めて、出窓の前に座っている少女を見やっただけだ。けれど彼女は微笑み一つ返してくれなかつた。ワンピースの裾にできた皺を一心に伸ばしているだけだった。

家政婦さんがお茶を運んできた。カップとソーサーが触れ合うカチカチという音が、いくらか気まづさをほぐしてくれたが、すぐにまた沈黙が広がった。

書斎は天井が高く、寒々としていた。外はあんなにいい天気なのに、厚ぼったいカーテンを引

いているせいで日差しはさえぎられ、シェードに埃のたまった照明は弱々しく、部屋全体が薄ぼんやりしていた。北側の壁一面を占める書棚にはかなりの蔵書が並び、革と紙の混ざった独特な匂いを放っていた。

ざっと見回したところ、収蔵品は豊富にありそうだった。もちろんきちんとした鑑別をしなければ何とも言えないが、玄関ホールから階段、廊下にかけて、いくつか目を引く絵画や彫刻が飾られていたし、書斎にも置時計、壺、ランプ、ガラス製品など珍しい品が見受けられた。

ただ問題なのは、保存状態がよくなさそうなのと、貴重品とがらくたが何の秩序もなくごちゃごちゃに入り乱れていることだった。前世紀末の制作と思われる牡鹿をかたどった銀の燭台の隣に、安食堂から失敬してきたような灰皿が置いてある、という具合で、これらを全部洗い出し、分類し、補修し……となるとかなりの労力を必要としそうだった。今までに関わったプロジェクトと比べても、込み入った仕事になるのは間違いないかった。

「きつと、いい博物館になると思います」

とうとう我慢しきれずに僕は口を開いた。不意に老婆は顔を持ち上げ、初めて僕の方を見た。「個人のコレクションとしては、上質の部類に入るでしょう。美術工芸品だけでなく、調度品、庭、そしてこの屋敷そのものを含めて考えれば、相当な博物館に仕上げることでできるはずですよ」

「今、何と言った？」

口調に棘があったからというより、その貧相な肉体から発せられたとは思えない威圧的な声の

ポリウムにたじろいで、僕は口籠もった。

「ええ、もちろん、すべては、ご相談させていただいた上での話です。ただ申し上げたかったのは、いろいろな可能性があるということなんです。村の役場にコーナーを設け、お名前を冠したコレクションとして展示する方法から、この広大な敷地内に新たな博物館を建設する方法まで、ありとあらゆる……」

「さつき、何と言ったか、それを聞いているんじゃない」

「さつき、と言われますと……ええ、何でしたか……いずれにしても、博物館の話だったと……」

「ああ、じれつたい。ほんの数秒前に自分が喋ったことさえ正確に再現できないとは、何と貧しい記憶力。それで一人前の博物館専門技師とは、信じられん。とにかく私が一番我慢できんのは、愚図じゃ。愚図愚図した奴じゃ。物事は何でも、無駄なく的確に運んでもらわなくては困る。ご覧の通り、私には余分な時間など残されておらんのでな」

一個一個の言葉が頬骨の奥に落ち込んだ唇から弾け飛び、部屋中に散らばった。その震動と呼応するように、老婆の指や肩先や膝頭も震えた。

「この家のがらくたを博物館に飾れなどと頼んだ覚えはない。勝手なことは言わんでほしい。だいたい先祖がいい気になって、金に飽せて買ひ漁った物など、誰が見て喜ぶ？ 誰も喜びはせん。ああ珍しい、ああもつたない、と言ってせいぜい展示ケースに汚らしい指紋を残すくらいのことじゃ」

老婆はますます深く背中を折り曲げ、上目遣いにこちらをにらんだ。頬はこけ、眉毛は消えかけ、帽子からのぞく狭い額には腫んだおできができていた。

しかし彼女の顔を圧倒的に支配していたのは皺だった。眼球も鼻孔も唇も、皺の奥に隠れていた。それはほとんど髪と言ってもいいくらいに深く、すぎ間なく刻み付けられており、昔勤めていた自然史博物館の展示品、北氷洋のセイウチの皮膚を思い起こさせた。

「この家に飾られている品々で、私が自ら労力を使って手に入れたものなど、一つもない。全部先祖が勝手にやったことじゃ。その後始末を何で私がしなけりゃならない？ 真っ平御免じゃ。私以外の者でもできることを、私はやらない主義にしている。これがすべてに優先される原則なのだ。ここまでで、お前が肝に銘じておかなくてはならない真理を二つ示した。さあ、言ってみよ」

僕は背広のボタンを一つ外し、冷めかけたお茶に視線を落として気分を整えてから、口を開いた。

「物事をてきぱきと進める、そして、人がやらないことをやる……」

答えが合っていたのか間違っていたのか、老婆はただ、ふん、と鼻を鳴らしただけだった。

「私が目指しているのは、お前ら若造が想像もできんくらい壮大な、この世のどこを探したって見当らない、しかし絶対に必要な博物館なのじゃ。一度取り掛かったら、途中で放り出すわけにはいかない。博物館は増殖し続ける。拡大することはあっても、縮小することはありえない。まあ、永遠を義務づけられた、気の毒な存在とも言えよう。ひたひたと増え続ける収蔵品に恐れお

のいて逃げ出したら、哀れ収蔵品は二度死ぬことになる。放っておいてくれたら誰にも邪魔されずひっそりと朽ちてゆけたものを、わざわざ人前に引つ張り出され、じろじろ見られたり指を差されたりして、いい加減うんざりしていたところで再び打ち捨てられる。むごい話だと思わないか？ 絶対に途中やめはいかん。いいな、これが三つめの真理じゃ」

喋りだした時と同じくらい唐突に、再び沈黙が訪れた。口をつぐむとすぐさま、彼女は消え入りそうなほどに小さな老婆へと戻った。身体の震えは治まり、目は下を向き、さつきまで唾と一緒に吐き散らしていた精力は、静けさの中に飲み込まれていた。

この落差にどう対処したらいいのか、予測が立たなかつた。目くぼせだけでもいいから、せめて少女が僕に心を伝えてくれさえすれば、もう少し居心地もよくなるのにと思ったが、相変わらず彼女は部屋の片隅にひそんだきりだつた。

カーテン越しにも日が傾きかけているのが分かつた。風が強まってきたらしく、遠くで木立のざわめきが聞こえた。足元から立ち上ってくる冷えた空気が、沈黙にいつそうの密度を与えていた。

「お前が修得しておる博物館の定義について、述べてみよ」
入歯が外れそうになり、一段と勢いよく唾が飛び散つた。

「はい」

自分を感じのよい人間に見せようなどという努力が無意味なのは、もはや明らかだつた。僕はただもう、頭に浮かんだままを喋ることにした。

「公衆に開かれ、社会とその発展に奉仕し、かつまた人間と環境との物的証拠に関する諸調査を行い、これらを獲得、保存、報告し、しかも研究・教育とレクリエーションを目的として陳列する、営利を目的としない恒常的な機関——です」

「ふん、つまらん。国際博物館評議会の概念規定を、暗唱しただけじゃないか」

老婆は喉をゼロゼロいわせ、一つくしゃみをしたあと、入歯を奥に押し込めた。

「いいか。そんなせせこましい定義など、すぐに忘れることじゃ。若い頃、世界中の博物館を観て回った。丸三日かけても歩ききれん巨大な国立博物館から、偏屈なじいさんが納屋を改装して作った農機具資料室まで、ありとあらゆる所をな。しかし、一つとして私を満足させてはくれなかった。あんなもの、ただの物置にすぎん。叡知の女神たちに捧げものをしようという情熱が、かけらも見えん。私が目指しているのは、人間の存在を超越した博物館じゃ。何の変哲もないと思われるごみ箱の腐った野菜屑にさえ、奇跡的な生の痕跡を見出す、この世の営みを根底から包み込むような……まあ、いくら説明したって無駄かもしれない。〃営利を目的としない恒常的な機関……〃などとぬかしておる者が相手ではな。今日は何日だ？ 三月三十日か。野ウサギの受死日じゃないか。いかん、私としたことがうっかりしておった。野ウサギの関節付きも肉を食べねばならん日じゃった。日も暮れてきた。私はもう行く」

老婆は杖を握り、立ち上がった。僕が手を貸そうとすると杖を振って払い除け、よろめきながら書齋を出ていった。少女が後ろに付き従った。僕は黙って二人の背中を見送った。さつきまで老婆が座っていたソファーには、小さなくぼみができていた。

その夜僕にあてがわれたのは、裏庭の外れにある二棟続きのこぎっぱりした離れだった。左右対称の二階家がくつついた造りで、隣には庭師の夫婦が住んでいた。主人は駅から屋敷まで車を運転してくれた男で、奥さんは書斎にお茶を運んできた家政婦だった。

玄関先で顔を合わせた時、庭師は感じのよい挨拶をしてくれた。

「新しい人かい？」

「ええ、でもたぶん、採用は見送られるでしょう。面接が散々な出来でしたから」

「そんなこと分らないさ」

「気に入ってもらえたとは、とても思えません」

「あの人に好かれようと思う方が無茶だよ。まあ、気に病まないことだ。早く寝て、長旅の疲れを取るんだね」

庭師は長年身体を使って仕事をしてきた人特有の頑強な体格の持ち主で、まくり上げたシャツの袖から日に焼けた腕をのぞかせていた。屋敷は広すぎるし、娘は若すぎるし、老婆は歳を取りすぎている——こんな秩序のない混乱した状況の中、彼が示してくれた健全さとささやかな思いやりは、僕の慰めとなった。

日が沈むと窓の外は一気に闇で塗りつぶされた。いくらまばたきをしても、微かな明かりの一点さえ見つけられなかった。屋敷は木立の向こうに隠れ、黒い塊になって夜の底に沈んでいた。

家政婦さんが運んできた夕食を食べると、あとはもう何もすることがなかった。一階に台所と居間、二階に寝室とバスルームがあった。家具や日用品はどれも機能的で品がよく、母屋に比べればずっと整頓が行き届いていたが、たぶん明日にはここを去ることになるだろうからと思い、余計なものには手を触れないようにした。

旅行鞆は開けないままベッドの脇に置いた。バスルームを汚すのは気が引けたので、一枚だけタオルを借りて身体を拭き、あとは口をゆすいでおしまいにした。サイドテーブルの上には、アイロンのかかった気持のよさそうなパジャマが畳んで置いてあった。家政婦さんが用意してくれたのだろう。少し迷ったけれど、やはりそれは使わないことにして、下着一枚でベッドにもぐり込んだ。

ただ一つ、『アンネの日記』だけを鞆から取り出した。寝る前にそれを読むのが、長年の僕の習慣だった。どこをどれくらいの分量という決まりはない。その時たまたま開いたところを、一ページか二ページ、あるいは日記の一日分、声を出して読む。

どうしてそんなことをしはじめたのか、今では思い出せない。『アンネの日記』は母の形見だ。母は僕が十八歳の時に死んだ。

僕はまだ出会ったことはないが、世の中には寝る前に聖書を読む人が結構いる。そういう人の気持に近いのだろうか、ホテルのベッド脇の引き出しに聖書を見つけたら考える。もちろん母は神様じゃない。ただ、意識が肉体を離れる直前、目に見えない遠くの何かと語り合うことで心を鎮めようとするその回路が、似ているように思うだけだ。